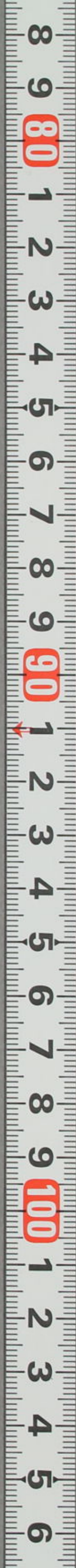


續儒家考人後

中



~ 5  
2766  
5





門 5  
2766  
卷

續佛家奇人後卷中



官司能順

政内當竹内書一遺編



能順ハ初不燈の文司之連秋不長トて世不獨歩以貞享乃  
帝元旦子呂之連分れ燕之む沙威のありりむわふ清  
硯とたふりるそ時たぐまの向けさ初るや筆れ海に色  
妻の水波に加賀大守の招きに意トく小松梅林院より  
洗免里以し毛蕨門の柳しきそ居成初少不雅談敷初  
不まふあるし連能のたぐひぬかぐえやとある見不秋風ハ  
芒打ちる夕べか秋風も芒打ちる夕べの二句と書く  
此は所述ははとにこれ能名もそけちめとがこれに翁  
も其持算に伏し進げる之元禄七年の冬翁の顔白も

續佛家奇人後 卷中



命と殞て以て哀しく歎かす。是より死す時之世の強盛なるとは  
 年六十七才及び八十才も亦くハ素はる成成とて古人云  
 極老れ死者ハ多く風流の芳きと云ふにぞかや申す試道  
 われも若くハ年六十と限りてあるべし我も羨しく侍ると實  
 小及も健康の人ハ凡丈の間絶たせきたるはと尚時かた  
 わりこあじ

本因坊

本因ハ英流の國大恒此人吟史と云ふて風韻あり早苗  
 みる命の才多きと云ふせり一に有下大恒切子小及もハ長  
 妻小後れ人ハ一才多し氣ハううと云ふに鏡うか時ハ蕉翁  
 ある人の會遊少く一蒜はゆきに考をあらめてしと云ふ  
 一考れぬる花の徳をよめけるこ附りしが尚時英流乃

本因坊ハ徳乃の物儀をばうて使ひあるふゆりせと事と  
 多く志海して同遊けるは坊より蒜の難小考の居るは  
 縁めゆり一考れぬる意の徳をの初りしハ蒜と代る斧の  
 おこぞ身ゆると云ふりれ返去之はれハ其和尓の前せり  
 他は有る一考れぬる意の徳をの初りしハ蒜と代る斧の  
 精簡より一考れぬる意の徳をの初りしハ蒜と代る斧の

天野桃隣

附 津尾桃翁

天野氏ハ伊賀上野の人蕉翁のつ子ハ壮業官を禱し一  
 江戸小東に初見桃隣といひ後桃翁と改む右白堂又  
 吳竹軒とも号し一志挑や帯もからげあり色ハ六月の心  
 りや淡河大和河一及く拾ひあつめて業山子ハ初者  
 や人ハ桃隣ハ初の中その調落すとい人の風格ハ元祿の



武江

荻原

木白堂

何と云  
三音  
清潤  
有記押

紅葉如巻 歌仙

硯 長

桃清改テ

桃



つゝとく 櫻々何と云ふも春月

けいせい 沙翁江の清へまうづるとして人を信じて菴法の歌に  
宿る旅店の女房その秋産雨不降ゆた二人の更と出家なる  
べしとちひひぬは安産の符とをよ隣いとちひひぬとて画に  
符の一向は出て巻しけるがお産平産の祝ひありきとて  
おにやうとある人を九折に折らふ何と書けしけるや隣に  
つゝとく 出くしつゝとく 出くしつゝとく 出くしつゝとく  
とゆるる者こと大いよ 嘆羨せられし又いととくきん成る  
に賓客と暮夜にさくは人もお和伴お招くる折かし巻熟の  
ひるれは一もくふを水辨と後けおきお拭ひをうけおさ  
客うらうら後打よりて掃除はるお掛おきしお拭ひはる  
をいんえびお出いふとわんせし一あ日と色しけるおおひ人の  
許より礼文お出おきし末に一つとるおお拭きおわのさう



とハ渡あや先さきよりあれはくそ日ひの偷ぬす見みハあれはくそこ  
瀬尾氏せゐしハ江戸えど柳やなぎ系けいの日ひよりにま先さきり初はつめ秀ひで和わ日ひ志しこがひ  
て杜つと格かくとありて後のち桃もも隣りんのつ中なかに入い海うみ洲しゅう致ちしく其その名な須す  
絶つぎ又また练れん舎しゃ桃もも菊きくと祿ろく以い「ひこはぢハ渡あやのたふれや梅うめのむ  
「たふゆき松まつも祿ろくむるや春はるの匂かほ

逸人二川

二川ふたがわハ越えつ中ちゆう留りゅう山の産うぶりく先せん祖ぞより代しろく其その志しに依たふは  
人ひとつゆ小こ江え洲しゅう身みを拵しらせむ子ことありひ或ある時ときをさく形かたひわ  
くると小こ許ゆるした中なかありひあつと加か怒どた中なかありとむそくに羈かり  
止とまるれ計けいありとすて俄あや又また鬢かみ髪かみと刺されあむ春はる入いたくとあひり  
その所ところと立た去さるとそ「米こめられる人ひとハ述のく花はなは香かくと我わが身み乃なり  
隙ひま子こハ出いれおせり右みぎ守まもりく慕こひ道みちて替かわあくとそ海うみ  
祿ろく楊やうりりくそ志しと遂ついく先せんらる依たり留りゅう山さんれやうりみ一字いちご  
とむらび生涯しやうがいと閑かん寂じやくみくじりるとそ

風士梅貞

梅うめ貞さだハ侍さむらいお忌いみ山の人ひといけなきより佛ぶつ社しゃとあのみ十七しち茶ちや  
の表おもて「山やま守まもり只ただの横よこが二三二三本ほん蕙わい菊きくハ四よ角かくの邊のへ宮みや古ふるよて  
ひ向むかとまきそ志しと感かん慨がいせられとそ又また「かこよせて水みづもよせ  
くりく此こゝつをさあど祿ろくぞくが厚あつく若わかやうと冥めい途とおむを  
むく通とほ時とき侍さむらいお一人ひとりの風かぜ士しと失うしなへりこととまれ

渡り山

渡あや氏しハ京きやう都との人ひと弱じやく冠かんれ次つぎより産うぶ較かくのつり入いる形かた致ちして  
後のちハ似に船ふねより後のちく拵しらせむはく先さき蒙もう山さん向むかと芳よし山さん後のちハ山さん中ちゆう  
改かむ招せう鳩たう朝あさと号ごう以い「反へん橋きやうやあえく改かむらうあきと所ところ「せ先さき



魚の骨を食ふは生身魂遊者を初ひく「此の骨はこれにうまき花や冬栴子紙先をける人へ」此ぞ洞饅頭をそ毛敷みての毛を分けてけ六尺四寸狭く老るるの一日に数十里歩の聲のたぶき尺餘ううと此の骨を食ふは初中あどりく神人として稱せり

小沢ト尺

小沢氏ハ江戸小幡町の人吟使よりとて更く孤吟こいひも何邊の奉りや蕉翁を我を至一とよりあれと後乃河に号ぶ一日河小幡改入りてあふとト尺と名けられこれ小沢の筆字は省略せられりといひありり一を御向多きが中に「秋は雲ハ富士山いりく小幡をりり

無腸慶士

其揚慶士は予免医と業とて難波をせりりそ人こあり名利よりこく當世はたごを自らり外剛あり内柔ありあれ我性くと固く更く其揚れ号をあれり佛社の宗因の流と波こいとも又蕉翁の風と志こふ一を家酒と出く田登に畫擲はるるを一月おけふ己が世ありみあり蟹その磊落くこれおとて深く巻留りの玉がりり腕を古にせども其探り見はとりおとあり竊は佛士の秘術ある連袂の抄物れを撥く一柱に膠一舟お刻めるの獲きとられひて也哉抄をあらうり手おを波の梗條を志るり其綴を同りる者ハ竊はるるがあらうり次第に後代の無腸あるうり

竹下東順

竹下東順ハ江戸別の人其南う父之若うりより医術をやら



ひたの産こせしが経なく本田侯より傳祿を以て妻子  
とやしあふ瀬く老あ當んとはる次官路をいひて市居  
お替りり徹りとのしんで机とさう次等紙はあてはる  
あは十年あまうそれは吟櫃かみてまとうや一白魚や漢  
菊が園あはわひあがう一奉あもほぎれぬりのや奉の當  
蕉菊評しと云くは人江の喫田お生れく武の江戸お終て  
こけりやらば大隈は於市の人あるべしと

後者乳雲

元祿下れ郊のくく林の央は水上の月見ひと番子の沙翁を  
はく免く沈田河はあひく清光お所をさうく各句他を觀  
ひらるに仙花が後者半田所といさりの袖れくお洒あうく免  
なまどしとあるるが姉と公にうらびりまうれ一輝紙吐く

一若月ハ沙ああくるく小ある菊をほく免法人の且うん  
且はあくる句他を止ゆりそれより後ハ乳雲と渾名して  
半田所とハ呼ばしけるく昔一後網於居のは鏡より水  
上月とさる歌おさうり一財田金より使あ来り居く書傳の  
一そはうまのくんとそ一水やそそくや水ともんえりり  
かよひては免る秋の夜の月ときあえしど日紙同おはるの  
後ありり候

後者九兆

九兆ハ加州金沢の人お出く医と業といは壯業より蕉菊お  
就く後後義の撰お加りるは毫の櫻湯おのづう雅情あり  
骨采の州れあうりも本芽うな一市中ハ物のむひや夏の月  
上ゆくと下来るを云や秋のそく若くもや若本つむ家のまこ



わたり何れの山もや羅ある人と傳りて己も在ふ嶽にはあが  
るゆ多牢中はくこの今「嶽のそれ強きよ花のちるま」  
「かげろののみもの許さぬ風うたきく人泪と流さびとつふ  
あとなう「初くおれあう」まう「縲綆の若と免る所  
どそはせとあさゆ」わ思ひひる果ハ亡命し終る所  
と〜〜次

饒屋社國

饒屋本名清八尾張の人社國と伝名し菊丸と稱し貞享  
六年の表河翁「道徳」吉井山小宅るた郡山入く宇古  
の郷より之傳の分伝あり傳りて後何處もや羅ありて死  
刑お行つるべきに極原を以てお「蓬萊や西玉のかさり橋山と  
吟せしと國をすし免るは嶽のあまう羅一号と減しと同玉  
伊良古嶽おわが所の歳祀もあくそ所と流るされハ昔子  
がけ人を悼むむれを「お伊良古嶽の社國例をく失るはし  
額人より申しあしけり」前もむつとくそ「奪むとら  
足附くうれしとたごま奪れくるむし」と思ひて「羽ねけ  
る考考者ぼりりそいらと嶽

山本荷分

山本荷分ハ尾張名古屋桑名町は恒り檀本堂と號し慈門  
の名に之年中行度供居蘇白散「いもけちや居獲たわ初  
る人次才表日奈」こ「毎日吾居の友のつらみくる石清水  
臨時祭「皆かともあつふかぶら橋くか灌佛「けかれ日や次  
手小洗ふ仏くら端年「面瘦く葵附くる發うはし「施米  
「打わけく施米束を中くく此乞巧奠「若菜より七夕祭ぞ



おほえよき駒迎「は免髪も旅の姿や初む之撰虫」系の  
 紫や馬のやれとる（紫十）更夜「玉袋の夜ぐらと帰るを  
 五節」ゆい娘小鏡とび指波折ふう追灘「おれや振う  
 ちづも鬼の角大ひふ其他も消えたる枕を晩季沙翁の勅  
 札と帯をしく橋ちとつと世と世と世とよりおれといと世と  
 一きりみたりとて

宮崎前口 附此節千門

宮崎氏ハ澁州大垣の人致仕しと徳名を東字といひ後小前口  
 ことして蕉門の志成之「暁ゆや暮ありはく流連河」乃  
 ちや當も彼の足巻は先「庭木の庭ふつ」や初嵐むと  
 堂廟の繪不的ありおのを徳信あり多う班女が似を蒲津ら  
 ひお進を古手の打ぬきち中も去る取は免る法沙の月  
 に掃波ゆしとと云とけりけりはく徳あり上流下流  
 ハ月の初おれぬ合息も迷惑といふ當流のを及はそそバ  
 の突り候いなる人も一串は陰梅よりと替いとそそ  
 「味増つけくわがくれはよき堂廟うかそそ子世筋子門  
 風流あり初長の暮もく「よ」や君才はくちもちる橋  
 世筋「燐火小は基木小世炭とあそきけ千門

穂菰本節

本節ハ江州大津秋おれ免りあうをしとより蕉菰の門  
 程入く穂菰と号し「花さくもむづうけある老木汁  
 名月やよひハ女の夢げり「禪」竿かかせつ冬ありを  
 其卓見ありふべし芭蕉及古文お本節十月十日粟津の病所 苜蓿湯と  
 り依徳子打寄り食ひをけ免け世と梨実とのそ好と物ふ



菊うゝ制一け進ど志記も不守とたすふ友をむこゝ紙えは  
あま紙進む一片味ひてなめ後ふ菊いもく解胃うくる所  
あし死於ちう記ありこ是菊の病床は作りてそ深切化  
んおあえとるゆをゆと初べし

僧孝由

孝由字買年待州小任比親名とて亮隅上人とて近江の  
豊田小任職は庭小口根の梅と植えたる茶子とてはゆこ  
とい友小口梅庵の号あり蕉の小控ひて許六支考等と支じ  
若く教向ゆと無せり「枕や痴病おさゆるは代の妻」  
をき二年みその名跡うまけ僧とて先菊の風流を志す  
ととども之時候行の折うまればとちも打過あし一が昨  
の夜を獲るれと法用とひあしと様立とて菊の庵と記述  
しより少才のちぎり流きさりみよの仏は侍ある如くも  
あく菊の幻燈菴小容居の抄を幸ひ志記りに三時の切をつ  
て佛身を耕し終ふ其佳境に入しとて菊粟津小病は以ち  
法の少れ年忌と物ひろとそそ隠終よあはれとくすえし室  
永二年小寂は年四十六

磨工牧童

牧童ハ加州金沢の人捌刀の業とりて名老のたつきとハせり  
才小枝と蕉の小控ひて左にその妙境入る「故けられきハ  
ほめくとみうの月」種彦をゆりしそとて粟書や支考  
おれが為小傳とて云く牧童ハ被が兄にしく北枝ハはが才也  
素より謝公が才能と事ハは進ハ嘗て院家の留書とも次書  
は略むしハ梅菊の風流と志しひけるも中次蕉の小入て時の



雅おあそぶるふおたりかづはたえこバツ葉に生えぬるを乃  
 被ハ梅のむの清きに嚙りおれハ郊のむの曇れるふよる略吟  
 席定會おれ人とあつはとふあとなし時居眠り強臥く  
 生涯の物とせり略貴女もあれと見さし一守明もあれと  
 許したまひ終り兜率の内院お祢むらんごぞ言あうる  
 御南翁うけく或法師おむひて牧童ハよ此老くと申さ進  
 一はよくて悪うらんやあしとてようくそやそ翁あら  
 てハあしどか一拙うハ生てハ光あそくとも敬佛ハ後たうら  
 んとつるむう一人のむを二人ののふ御てや作らん牧童老  
 一はし我そのうみ翁はゆええ一時或の葉子堂が一浮葉  
 夢紫去の蓮風情はきたるむとつふ向れ物ううりに及ぶ是ハ  
 おのれんと音にく唱たうんがよりことくられしおハ御ごとも  
 差え侍らばと時の人あれと辨しとけふ人ハ人のたうひわり  
 てはうぬ涼ともたどりうるやうにのらん初ありれまある人ハ  
 世不考しこはれハ老の飯あえうむを人の乳をの胃に於て  
 風雅も危うくはとつふべし

瓢水居士

播陽の瓢水ハ人にあつれ一富家あれども倦り不金銀を擲  
 く後ほぐし一ううもむにうけぬ夫丈夫く富妻亦或し  
 の元且ま一かのちりと打火れおハ去季の物一流るや我抱  
 鏡ハあしし一山一婦みぬのご定まてあやうの秋を介調る  
 あしあつべし一平生をうしき人の難波の花女を根引せんと  
 云るといれ免く一もふとるあをうり燈におけ蓮花葉或  
 人ハ達磨の賛あそれく一親以進ハ花も葉もあし山れいを



と一老て佛社の名手とせえは西へ名所建てる時「けし  
炭も袖味噌に付きうろ摺のくあみくの佛人おあ  
ごりうじ」扱あおの月が鳴る時鳥温故集お八藤風とやう不審  
瓢水初名藤風と云ふる不  
知の海かの大匠とのちあより名珍く玉砂之或は初句  
一あ名とせして蕙翁と一其南とあはれぬ老のいつもう  
軍田子ふゆづりてあくはあるさず

白馬散人

なるハ播州加古の人佛社の蕙風と好く上を之める元朝一  
鐘撞のあくく下るはさうなる古今を此人いささ云所と  
称はべし「隠れ家よすぎさ」牧巻のうりうり「朝歌や昨日  
とちとせれ身ごし」之「日北糸と所」て「干以時向る一切  
衆生悉皆成佛のあつと」盗人の銭がく雪の巻より非いづれ

の寺や社のうへへ出たる以般上人の待あれ遣おゆひうれ  
く教向せよと所しに「萩萩の中おまごう」後よおれ成  
く此張巻が夜泊の待れんととせまれく「撞撞かり余おれ鐘  
きく霜夜うると其終情と夫先なる彼麦林う教亭ふ乃待  
のふ城」家守をそれも淋しひう飛で新と縁さうといつ建の  
優劣あるべきやば人あうを一時笑しかりしも巻ての後ら  
願ふ家うけりむらりれ子紙りするに妻死しとも先でまや  
しけるが子紙るる子就お去しと佛社へとくびとて去敷  
の二道とゆかりをうるやうをく人と改し以意へ並る敷十  
金と出しと田代をかひて興しとつふ色や一多の暮乃  
程あふ「巻とあうくわさる」状子の大振引いづ道り表ああ  
でものべきと隠者日似ゆりぬ速懐と道時評きうが子とあふ



の存りたるよしと後より人の初りしと

稻津祇堂

稻津氏の稲波の人けり免乃不入し時の清流と俗名をいふなり  
しより馬を小脱り又竹文をもたし免り多をてより緒圓  
と種歴ひるの志いできくゆづ夏州早雲寺ありより宗祇法  
師の藝業は狂く發か一切に入らしとこれより祇堂と改む  
その時の偈ふ七顛八倒五十二翁蓬頭薙卻明月清風と又やふ  
我かあもみあつきの石の上遊ふ東奥羽絨の名も折し如く  
アとく江戸にて暫く沐門は仮居に湯屋の口舞一森ぬくま  
るにあそつく紙子かあ梅屋安へゆりて梅はうり多紙  
ひく彼の志ひもほ女達磨の画賛を好まれてそのらんらか  
らんぐと猫せしと「九年何若界十年はああも妙法寺の

大に浮少あれとすくより深意よりあへりしとく深く貴  
嘆せしれしと後洛北紫野おは免り以ハ散雨江戸千の朝日  
江戸のありむの途中箱根湯本の里におく段々豪華より  
八年四月の遊偈に舉手動足平生神通鉄牛破裂音信不通  
事を釋ひるの程か「あれ世とあはれりりりりりりと死ねるなり  
北嶽はがりの極楽を助その門人稱と祇法師の藝業より  
たて玉蜀山人と遊居は又臺と沐門ハ幡社内ハゆり  
とく門系多うりの中に江戸をて四時款と稱ひる説あるなり  
長せりいよゆる祇徳祇の衣邦空隨魚費之

長谷部柳居

長谷部柳居ハ江戸の人を危く宦途を避て閑寂小くしるを



向ふのありやひ流社の孫麿とゆききく意冠の風流  
 坂のあり。青柳や二筋みはらむ木より。一芥子烟や我物  
 ありのよきひは。淋しけの極意はねじり。家守考心とせ  
 その名の金炭小指ん子とくれひ馬光等の六人と組し。く  
 再び意風小指ん子とくれひ馬光等の六人と組し。く  
 ひり判者ご放て四女の前他六抽とちん各自お金出の光り  
 あり。く一時世人を驚嘆せし。む或時江戸に名取と程免とる  
 とて龜井戸より。友橋のほれを雨く鳴かを此本中川紫  
 吹より。菜の花やほちの及目のくひり佃島より。拾ひ  
 より。あはれより。れより。雀三回りあり。一首代小案山子と  
 現ト守り神又を立。猿せし。此一巻の中と志や。忘て改  
 巻の中ありと新巻に新柳の癖ありしも。晩年病うらして

病中の此の多より。枕中。出あり。居る。八延家。世れより。の  
 妻より。有る。あり。何ん祝引よ。せ。猿の日記。く。拾居の事と  
 楽。む。筆紙。拾。い。も。花の。整。り。僅。し。七。日。ぐ。り。と。終。  
 一。も。三。間。の。あ。と。せ。あ。と。日。記。く。え。む。と。略。十。二。日。終。の。く。り  
 あり。晴。く。い。い。より。一。茶。考。れ。は。あ。け。く。り。終。く。り。十。四。日  
 け。く。十。ツ。時。より。風。い。る。一。花。名。も。や。蒲。堂。の。く。も。紫。井。十。六  
 日。終。あり。ある。巻。く。後。風。わ。り。八。ツ。時。ま。す。る。雨。降。い。か。ふ  
 け。く。ま。う。ま。ま。の。山。居。や。花。を。友。十。六。日。夜。来。風。雨。を。夢。志。け  
 ま。り。く。晚。より。終。更。は。は。れ。く。り。一。蝶。も。その。羽。衣。か。と。花。一本  
 十。七。日。け。く。く。夕。の。より。風。が。い。づ。一。む。り。あ。ふ。ん。く。り。好。む  
 や。庭。の。若。十八。日。ま。す。一。お。ま。来。く。漆。猫。現。は。び。一。俣。偶。外  
 十九。日。終。く。り。一。田。舎。あ。より。は。れ。八。ツ。時。ま。す。より。風。吹。し。一。あ。る



花をわくく弾きそ松の夢日本橋のわたり浮世小娘小松庵  
 庵といふあそて今あましくを跡くえざるも是の老が誰か  
 けや

大雅堂

附妻玉瀾

沈野秋平名ハ吾名字ハ貸成系陣の人画名古今をわり大雅二  
 号一九霞山樵もつ小東彌子あま大雅堂ハ名紙に海ふ  
 せぬまの知命の妻の冢且まいくはしやとこは建て片をわ  
 けれ妻芳抄より抄字の次一葛粉所よりあまを花れ志けく  
 かかちのあしねハ初る人中れこと妻玉瀾ハ澁山氏此女画をよじ  
 和名とあの名りた小美一これも矢探りくよくま不伝ハ  
 所れハ夫婦衣とたがひくく悪むあとなり一或は此史酒さうた  
 と求め来りく共不のむ妻裸うあを琴を弾けるといふ

松

や

ま

の

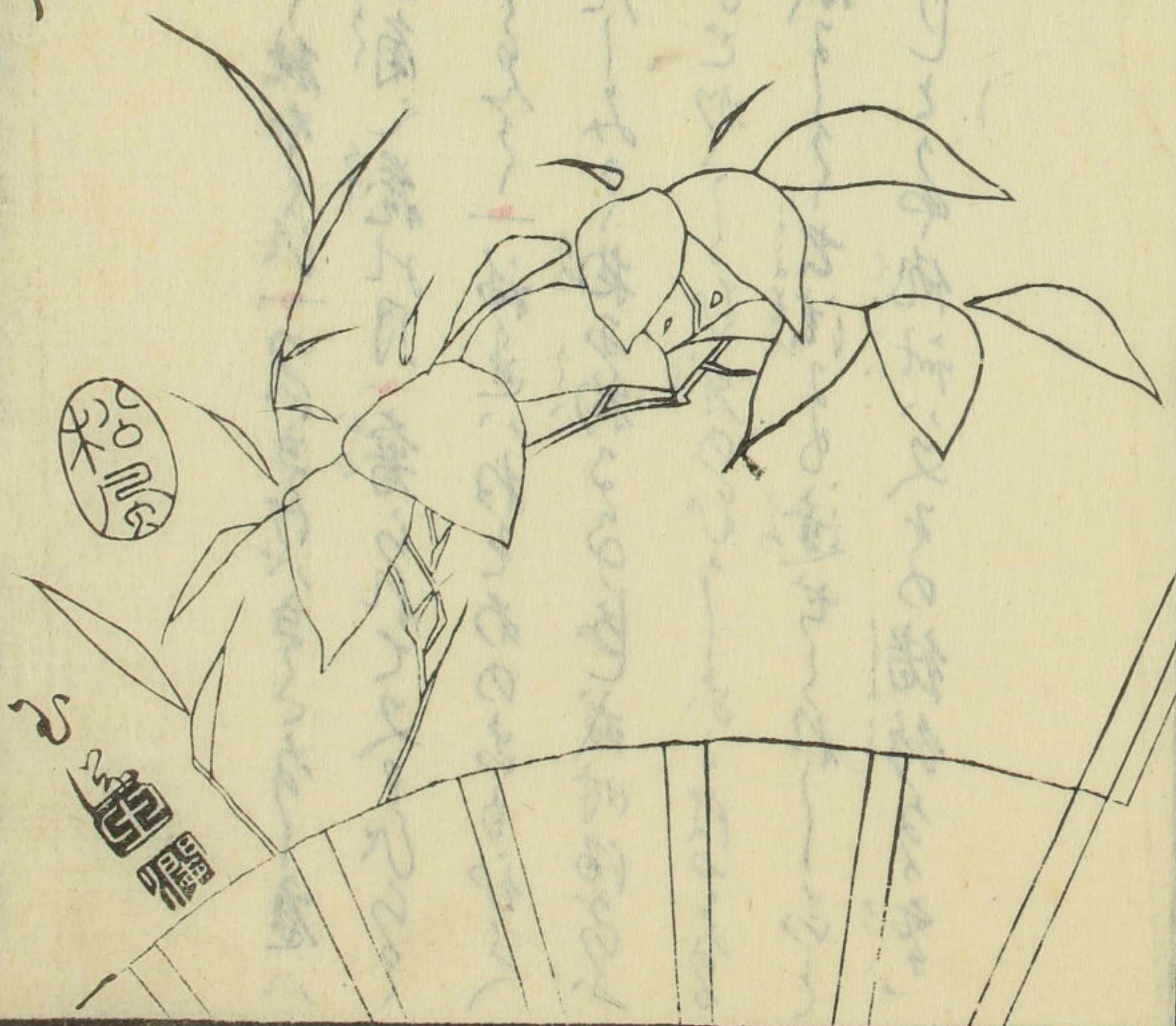
ま

ま

ま

ま

ま





大典禪師その墓遠小玉瀾配夫行と書けりも是等此類を  
やりのあるべし

泉石老人

泉石の浪遊の人其不好を能く以てついでにけりきこあり庭ハ  
梅ぞうけ其冬に其田角之苑に月奢られて又とびら  
紙子うる曉に乞食を乞ふに福遊ハねとあのおもむく  
お心と性つ子小酒をたのみく物か物るるは或時酒がふ  
と獨居しと飯舖のひとがくむ身のおうとまとなまある  
哉翁多先生博多藏りて其法も達せりけりあ  
その次初らざる者ありしとや他家の又その緒餘なるを

續他家奇人談卷中終



